

第7回神奈川活性化サロン

講演テーマ「観光都市横浜を目指して～横浜港の新たなる挑戦～」

◇ 平成30年5月18日開催

◇ ゲストスピーカー 横浜港大さん橋国際客船ターミナル共同事業体 代表責任者
株式会社小此木 代表取締役 小此木 歌藏 氏

発表概要

○ 横浜港の歴史

- 横浜港は開港(1859年)以降、生糸・絹を中心に貿易額を伸ばしていったが、昭和5年頃になると、日本の輸出のシェアを神戸港に抜かれてしまう。こうした中、横浜港は受動的な発達(天然の良港、政府の保護、外国商人の居住)ではなく、自発的な発達(港湾整備、京浜間の交通網の整備、横浜の工業化等)を目指していく。
⇒ 埋め立てにより京浜工業地帯を形成し、日本の海の表玄関として発展していく。
- しかしながら、プラザ合意(1985年)を契機に、製品輸入の比率が高まっていくとともに、生産拠点が中国に移り、京浜臨海部の製造業者数も減少していく。

○ 横浜港の新たなる挑戦

- 上記のような環境の変化に対して、平成28年4月に横浜港振興協会、神奈川新聞社、ハリマビステムの3者で、大さん橋客船ターミナルの指定管理を行う「横浜港大さん橋国際客船ターミナル共同事業体」を設立。海(港湾関係企業、団体)と陸(商店街、商業施設)が地域で連携し、大さん橋への年間来場者数300万人、年間入港船数300隻を目標にするとともに、市内更には県内の観光地化を進めることで経済の活性化を目指している。
- 平成29年6月には、横浜市港湾局と横浜港振興協会との意思疎通を円滑にすることを目的に、「横浜港客船誘致戦略会議」を設立。課題を一つずつ解決していくため、観光地(鎌倉、箱根、三溪園等)との連携、岸壁・交通アクセスの整備など1,000項目にも及ぶチェックリストを作成して、お客様に喜んでいただけるような環境を整備しながら、アウトバウンドの需要(横浜港から出発するクルーズ客の取り込み)を開拓している。
- また、新たな取組みとして、協力企業8社による新港地区客船ターミナルの整備を計画している。具体的には、新港9号の岸壁を改修し、CIQ施設(税関、出入国管理・検疫)、商業施設、ホテルが入るターミナルビルの建設を予定している。更には、新港ふ頭を中心とした、陸・海・空の交通ネットワーク網を作り、地元住民や観光客が便利で快適に移動できる手段を導入・拡大していくことを考えている。これには、赤レンガ、大さん橋、馬車道など地域との連携が重要である。
- 平成30年3月より横浜港客船見送りキャンペーンを実施している。黄色いハンカチ、タオル等を振りながら客船を見送るイベントであり、イベントを通して、地域の皆様や世界にクルーズの魅力や横浜港の魅力を発信していきたい。